

四五月古根をもぎ取事、唐の書にあ、鹽漬醬漬糟にも藏し、又は乾姜にこしらへ、藥屋にうるもよ  
り、まかれどもこれはば、やかるべし、鹽漬醬漬糟にも藏し、又は乾姜にこしらへ、藥屋にうるもよ  
し、さて七八月根薄あかく、紅をぬりたるごとくなるを、紫蓋と云なり、此時料理によし、市町にも  
賣べし、其後莖葉枯いろになり、根によく肉いりて、九月の末、十月の節に入比ほり取、屋の内の暖  
かなる濕氣なき所に穴をほり、わらを合せて埋みをき、用にまかせて、わきより手風の觸ざる様  
にとるべし、又雪霜のをそくふる國にては、十月まで置いてほり取ば、彌からくなる物なり、又ほり  
取て穴には入らずして、棚をかき、下にも廻りををも、こもにてよくま、とみ、其中へ生姜を入、下にぬか  
火ををきてふすべ、濕氣さりてま、とみたる口をよくふさぎをくべし、尤島よりほり取時、土をよ  
く去べし、又生姜の時、賣餘りたるを、干姜にすべし、淨く洗ひざつと湯煮して、かき灰にませ乾し  
上て、籠などにもりをきて、藥屋にうるべし、生姜にてうりたるに、價をとらぬ物なり、若自分に用  
ゆるは、灰を交るに及ず、功能ある物にて、日用かくべからずといへども、秋姜を食すれば、天年を  
損ずと醫書に見えたり、されども世俗なべて秋よく用ゆるものなり、但秋は用捨して多くは食  
すべからず、

〔成形圖說二十四〕波自加美○中

其圃は濕地によるし、されど寒暑を畏るものなり、夏は炎威を覆ひ、冬は凝澌を防ひ、地を易て暖  
處に移し養ふべし、しかはあれど乾たる處へ植れば、又枯萎カカなり、二月の頃舊根を栽れば、四五月  
にいたり黄芽を發し、既に新根を生ず、今江門近郊にては、土窖の中に釀し養ひ、四時絶ることな  
し、これ日用かくべからず、常にくらひて精神を爽にするものぞ、

〔藥經太素上〕干姜 大温ニシテ熱味辛

水ニ付テ能洗テ、石炭ノ氣ヲ去、少焙テ用、冷痢腹中ノ痛ヲ治、血ヲ止ト胸ノ痛ヲ治ニハ、毒ヲ不取  
治、効除胸滿除霍亂腹心疼、